

昭和 S Pレコードで辿れば〈四〉

朝日新聞 懸賞募集歌「兵隊さんよありがとう」

S Pレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

先日、ある韓国の新聞が、その社説の中で、「21世紀のデジタル時代に神の国から訪れる日本の首相を我々が迎えるというのはどうもおかしい」と論評していた。森首相の「神の国」発言の当否はさておき、筆者は、IT革命やデジタル時代が到来しつつあるからこそ、あえてアナログのS P盤の持つ神秘的な魅力にこだわっている。

(二)

L P、E P盤がS P盤にとつて代わってから、半世紀近く経ち、さらに現在ではC Dが主流になっている。その理由は簡単だ。便利だからである。

S P盤は一分間に78回転し、

十吋盤（直径約25センチ）の片面で約3分程度、せいぜい1曲しか演奏できない。交響曲になると、十二吋盤で三、六枚は必要となる。C Dだとたった一枚で交響曲が二、三曲、歌謡曲だと二十数曲入る。

S P盤はシエラックという樹脂状の物質でできているため、割れやすい、重い、かさばる、反りやすいといった欠点がある。手捲蓄音器で聴く場合、片面ごとに針を使い捨てるのも面倒だ。

(三)

それでも、S P盤には、その欠点を補って余りある魅力がある。S P盤をデジタル処理したC Dの複製盤も数多く出ているが、やはりオリジナルのS P盤の独特の深い味わいにはかなわ

ない。カメラでもそうであるが、旧式の二眼レフで撮った写真は若干のぼけみがあつて妙に人間的で温かい。それに対して、最近のカメラ、特にデジタルカメラはあまりにもシャープ過ぎて冷たい感じがする。絵画も同じで、実物をより正確に描写すれば良いというものではない。

何でもかんでも0と1という信号に変換して、早く、正確に大量の情報を伝達しようとする、この情報過多のデジタル時代にあって、S P盤は、かえって人間味がある。まさにデジタル時代だからこそ、これから大切にすべき文化財とも言える。

(四)

オリジナルのS P盤は、C Dの複製版では得られない情報も

発信している。レコードのレーベル、袋、歌詞カードのデザイン、材質などを通じて、その時代の空気、においのようなものが伝わってくる。例えば、歌詞カードも、昭和初期には四頁二つ折りだったものが、その後二頁裏表となり、戦局が悪化し、物資が窮乏する昭和十九年頃になると一頁裏表で大きさも小さくなっていく。レコードの材質も、大東亜戦争が始まるとどんどん悪くなり、表面がざらざらしてくる。

戦前のS P盤のレーベルは通常、黒とか赤の単色のものに曲名、作詩、作曲者、歌手の名前が印刷されているだけの無味乾燥なものである。ところが、特別なレコードに限って、ごくたまに多色刷りや写真を使った「特レーベル」盤が発売された。例えば、内閣情報部が昭和十二年に懸賞募集した「愛国行進曲」のビクター、コロムビア盤のレーベルでは、日章旗が多色刷りで印刷されている。

(五)

この特レーベルのSP盤で「兵隊さんよありがたう」(童謡)と「父よあなたは強かった」の二枚のレコードがある。いずれも昭和十四年一月に発売された、朝日新聞社の懸賞募集歌のレコードであるが、このレーベルには朝日新聞社の社旗が誇らしげに掲げられている(写真参照)。

「兵隊さんよ」の裏面は、「歌唱指導」となっており、児童合唱団が「明日から支那(ママ)の友達と仲良く暮らしていけるのは、兵隊さんのおかげです、お國のために・・・」と歌うと、「心の中で本当に兵隊さんありがとうと考えて歌いましょうね」と歌唱指導が入る。

筆者はどうしてもこの二曲の歌詞を好きになれない。自分の親をさしおいて兵隊さんのおかげですとは、いかにもわざとらしい。また、自分の父親に「あなた」とよそよそしい呼び方をするのも不自然である。

(六)

日本ビクターから、「つくりましよう愛國機」(昭和十二年八月発売)というレコードがある。これも朝日新聞社の「軍用機献納運動」のキャンペーンの一環で作った童謡である。同じ頃、「神風音頭」、「神風声援歌」という曲も発売されたが、この「神風」は、朝日新聞社の親善飛行機の名前である。後の「神風特別攻撃隊」、今日の「神の国」を連想させる名前をよくぞつけたものである。ちなみに、昭和十四年に世界一周飛行を行った大毎・東日(以下毎日)の飛行機は、「ニッポン号」であった。

当時の懸賞募集歌に関する資料を見ると、国民精神の高揚を狙った曲の募集の数では朝日新聞がだんとつで、毎日、読売、報知をはるかに凌いでいる。「皇軍大捷の歌」(南京陥落記念)、「皇軍将士に感謝の歌」、「防空の歌」、「航空日本の歌」、「興亜行進曲」、「勤労報國隊



歌、「国民徴用挺身隊」、これらはみな朝日新聞が募集した歌である。「航空日本の歌」の歌詞カードには、堂々と陸軍省、海軍省後援とある。陸軍省、大政翼賛会、NHKすら、「愛馬進軍歌」、「大政翼賛の歌」、「紀元二千六百年奉祝国民歌」の他にはそれほど多くの募集歌はない。

(注)神風号とニッポン号は「20世紀デザイン切手第八集」に採用されている。

(七)

こうしたことから、いかに朝日新聞社が先頭に立って、銃後の国民の「啓蒙・教化」に力を入れていたか分かる。日本国民

をミスリードせんとする体質だけは今も昔も変わっていないことを改めて痛感した。

朝日新聞は、未だわが国の国旗、国歌に対して否定的な立場をとっているようである。しかしそれならば、まず自らあの忌まわしい社旗を棄てるべきである。そして国民、特にいわゆる「少国民」を率先して戦争体制に駆り立てた過去の責任に対して謝罪すべきである。進歩的文化人が良く日独の比較で引合いに出すドイツのヴァイツェッカー元大統領の「過去に目を閉ざす者は現在においても盲目である」との「名言」を肝に銘じて欲しいものである。(続く)